

Zeitroman概念によるBildungsromanのパロディー化 — 小説論の視点による『魔の山』考察 —

北原 寛子

1. はじめに

トーマス・マンが1924年に出版した小説『魔の山』は、詳細な心理描写と登場人物の多様性、それらによって構成される綿密な展開を備えており、発表以来多くの関心を集めてきた。秘密結社員セテムプリーニとイエズス会士にナフタの交友関係に限っても、文化・社会史の観点から非常に興味深いテーマを提供している。どのモチーフが関心の中心となるかは時代によって若干の傾向がみられる。近年では、作品を生活文化史として読み直すなど、生活文化史をふまえて作品を問い直すスタイルが登場し、小説に描写された結核の治療法やダヴォスの町の様子と、20世紀初頭のヨーロッパにおける衛生問題やリゾート地の実際の社会状況に関連付ける諸研究が発表され、豊かな成果を上げている。ⁱ この動きの前には、文化・社会史の観点である場合、先述のように政治・宗教思想が中心に論じられた。ⁱⁱ また小説理論からのアプローチが多くみられた。ⁱⁱⁱ

小説理論による研究においては、その多くが「教養小説」Bildungsroman^{iv} として作品を解釈することに取り組んだ。この動きは非常に道理にかなっているようにみえる。というのも、トーマス・マン自身がこの小説をBildungsromanであり、ヴィルヘルム・マイスター的作品と繰り返し呼んでいるからである。^v しかし数多くの努力にもかかわらず、適切な解釈を見出すことができないままこの問題は放置されているように思われる。だがそれは自明ともいえる。作者自身が「ドイツの『教養小説』を肺結核に基づいて刷新することがすでにパロディーなのです」^{vi} と述べているように、『魔の山』はBildungsromanの伝統を汲む作品でありながら、同時に病に冒された主人公に健やかな成長を求めるといふ皮肉ゆえに、それ以前のBildungsromanのパロディーとしての性格が強いにもかかわらず、文学研究ではBildungsromanが成立する条件を主人公の(精神的・社会的)成長物語が描かれていることと規定し、^{vii} 正統派のBildungsromanとして主人公の成長を立証しようと執拗に試みたからである。作品の全過程の経過における主人公の変化と、最終場面で到達した人格形成の完成度がしばしば検討された。だが判断するためには材料となるテキストが不足している。最終場面では兵士となって第一次世界大戦の最前線にいるが、これはヴィルヘルム・マイスターが求婚を成功させたようなすべての問題点を解決する決定的な幸運を手に入れたのとは対照的である。ハンス・カストルプは戦場で命を落とすと解釈する研究もある。^{viii} その研究では主人公の死を彼の成長Bildungの失敗ととらえ、この作品は主人公の成長過程を描いた点でBildungsromanであるが、それが20世紀の社会において挫折せざるをえない点にそれ以前の理想的な人格形成を全うしていたBildungsromanのパロディーなのだと結論付けている。これはさきに述べたBildungsromanの規定を『魔の山』に当てはめ、その上でBildungsromanのパロディーであるという結論を導いているが、Bildungsromanと名がつく以上は主人公の成長が描かれるべきであるという前提を作品の独自性よりも重視して議論を展開し

ている感が否めない。Bildungsromanに関する諸議論では、主人公の成長を証明しようとするさまざまな試みが、かえって言外に失敗と挫折への集団的な恐怖心を浮き立たせている。やがてこの研究方法は度重なる議論の行き詰まりのためか、採用される機会が減少していった。

しかし本研究は、あえてこの作品をBildungsromanとの関係に戻して論じることにはしたい。しかし、主人公の成長の可否を問う正統派のBildungsromanとしてではなく、マンが当初意図していたように、その広い意味でのパロディー的性格を考察するものである。そのために重要な検討対象となるのがZeitroman概念である。Zeitromanということばは、作品の中に繰り返し登場する。ドイツ語のZeitには、日本語の「時間」と「時代」があてはまるように、Zeitromanには複数の解釈可能性がある。作者自身が作品内で強調しただけでもすでに2点指摘することができる。ひとつは、登場人物が自身の感覚的な時間経過と客観的な時間尺度が乖離していることを認めて驚くからZeitromanだとするものである (Vgl. 749f.)。第二の解釈は、作者が読者にたいして構築したZeitromanである。一週間の描写に多くのページを費やし、数年を数行で片付ける不均衡を実行するナラトロジーを指すという考え方である (Vgl. 257)。このどちらの場合でも、虚構の登場人物が実際の人間たる読者かを問わず、人間の生理感覚に起因する内面的な時間は、時計やカレンダーで等分され客観化された時間尺度に優越するという共通を示しているといえる。そこでこの第一、第二解釈のZeitromanをさす場合「時間小説」と呼ぶことにしたい。^{ix}

第三の解釈も可能である。先述のようにこの小説は当時の現在進行形だった文化・社会を描いたとの読むことができるので、その時代の現代小説としてZeitromanの呼び名が相応しいとするものである。^x

そしてさらに第四の解釈ができるが、これが本研究の課題である。第四の解釈は表面的には第三の解釈と類似して「アクチュアリティのある同時代の社会を反映した小説」としてZeitromanをとらえている。しかし第三の解釈が近年の研究成果によって再確認された用法であるのにたいし、この第四の解釈はトーマス・マンがパロディーの対象に想定していた若きドイツからトーマス・マン直前の文学状況を顧慮しているという点で根本的に異なっているのである。Zeitromanは、じつは19世紀から20世紀ワイマール期あたりまでの小説批評・小説研究で一般に使われていた用語で、類似語としてSozialromanやGesellschaftsromanが挙げられる。^{xi} この第四の解釈としてのZeitromanをさす場合、本論では「同時代小説」と呼ぶことにする。トーマス・マンが「同時代小説」を承知していたことは明らかである。^{xii} 一方で彼は「時間小説」としてZeitromanを用いていることはさきに指摘した通りである。すると、トーマス・マンは「時間小説」と「同時代小説」をどのように区別したのかという疑問が生ずる。結論から言うと、「同時代小説」と「時間小説」はときには意図的に混同され、あいまいな使われ方をされているところに大きな意味があるといえる。Zeitroman概念の意味が混乱している状態こそが「教養小説」のパロディーを成立させていると言っても過言ではない。この主張の根拠を示すために、まずは「同時代小説」としてのZeitroman概念の成立にさかのぼって考えてみたい。

2. 文芸批評におけるZeitroman概念の発生

Zeitromanという概念が誕生した背景には、近代ドイツにおける小説観の独特の形成過程がある。この語が使用され始めたのは19世紀半ばであるが、その登場の必然性を理解するためにさらに1世紀さかのぼった状況から検討する。

18世紀前半のドイツでは、小説を文学ジャンルのひとつと認めるべきだとする派と、文学では

ないと主張する派が論戦を繰り広げていた。文学ではないとする根拠には、アリストテレスが小説を文学に含めていないこと、筋が荒唐無稽すぎること、みだらであることなどが挙げられていた。アリストテレスやホラティウスなどのギリシャ古典に規範を求めることは、ヨーロッパにおける学問の基本方法が前例と因習から体系を帰納することであるため、われわれにも容易に納得できる。小説の興隆と隆盛が文学ジャンルの体系に書き換えを迫るものであったと考えるならば、当時の人々に戸惑いを生み出したことも想像に難くないだろう。小説の筋が荒唐無稽であるとする批判はバロック文学とその後の啓蒙主義にみられる思想の決定的な転換に原因を求めることができる。バロックの世界観では、現実も虚構も神の支配する領域であった。虚構はアレゴリーによって神の奇跡を現前させる場とみなされ、筋が飛躍することは問題ではなかった。^{xiii}ところが啓蒙時代に入ると人々は物語にも現実と同様の合理性を求めるようになり、現実には起こり得ない出来事は不自然であるとして小説一般を糾弾した。これにたいして小説の擁護者たちは、小説には読者にたいする教育的効果が見込めると主張しはじめた。たとえば18世紀小説理論の代表的論客であるブランケンブルクは1774年発表の『小説試論』において、小説はどのようにして徳のある人間に変化するかという状況と過程を細かく提示することによって、読者が立派な人間になるための手引きになりうるという説を展開した。^{xiv} また彼は小説家に合理的で現実的な物語を描くように求めるなどして小説の弱点克服に努めた。^{xv} 18世紀ドイツの小説を取り巻く状況の特徴は、バロックの伝統を継承していた実際の諸作品と議論の中で描き出される理想像が乖離していた点にあらう。やがてヴィーラントなど高い評価を受ける小説家が確実に増え、18世紀の末頃ようやく小説は文学ジャンルのひとつであるとする見方が優勢になってきた。

19世紀にはいると18世紀の小説擁護運動が結実し、小説はドイツでもF・シュレーゲルやクライストが登場しているように文学の中心的なジャンルに成長をとげた。19世紀半ばになると小説に関する議論は作品の前書きや雑誌記事のみならず、文学論Poetikや美学論Ästhetikでも展開されるようになった。ヨーロッパの文学論は前例と因習から帰納した体系であるとするすでに指摘したが、この基本的な態度が19世紀のドイツ小説論に重大な弊害を引き起こした。19世紀の論者たちにとって継承すべき議論は18世紀のテキストである。ところがさきに述べたように、18世紀の小説論は実態を反映していない理想論なのであった。19世紀の論者たちはテキストが生み出された当時の必然性を追体験することなく継承したために、理想論だった主張がいつのまにか18世紀の小説の実体があたかもそうであったかのように受け止められるようになってしまったのである。この状況を具体的に表しているのはモルゲンシュテルンのBildungsroman論である。彼は19世紀初頭にBildungsromanという複合語を現在確認されている中で最初に用いた人物である。18世紀末のブランケンブルクは筋の飛躍を防ぐために登場人物の性格がさまざまな出来事から影響を受けて形成bildenされる（名詞形はBildung）過程を描くべきであると主張したのだが、^{xvi} モルゲンシュテルンはBildungの意味を「形成」から「教育」へと転換し、小説は登場人物の教育を描くべきであると論じた。^{xvii} たしかにBildungは多義的な語であり「形成」も「教育」も通常の用法に含まれるが、形成は単なる変化の過程を意味するのにたいし、教育はそれに加えてイデオロギーを含んでいる。このなんらかのイデオロギーによる議論の独自の展開にここでは注意を払うべきである。このイデオロギーは、教養市民層Bildungsbürgertumのモラルそのものである。18世紀から19世紀にかけて小説が勃興した時代は市民が社会的地位を向上させた時期である。担い手と受け手の多くが教養市民層に属していたために、彼らの社会規範が小説論に加えられていった。「教養小説」の代表作とされる『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は

この議論の発展に巻き込まれたにすぎない。『修業時代』以降の小説論者たちは18世紀の理想の小説像がこの作品のなかに実現されていると考えていた。現実にとこまで一致するのは問題ではなく、すぐれた作品は小説の理想像を実現しているに違いないというイメージとそうあってほしいという願望によって結び付けられたのである。作品と理論が齟齬をきたす場合は、作品の都合の悪い部分を無視することによって理論の整合性が保たれた。『修業時代』は、アリストテレスがホメロスに規範を求めたように、新しい時代の文学論の規範とされるようになっていった。19世紀の詩人・批評家たちは18世紀の理想の小説論を伝統的かつ正統な小説のあり方と取り違え、18世紀の理想の小説論から理論上導き出したに過ぎないBildung中心主義と精神主義をドイツの小説の伝統として堅持した。それが19世紀ドイツ小説を、実作においても批評活動においても停滞させることになってしまった。Bildungsromanは『修業時代』の伝統を継承した近代小説群と考えられていたが、実態は18世紀から続く理想の小説論にディルタイがBildungsromanと再命名したものであり、教養市民層が文学理論の形で展開したイデオロギーである。

ではなぜ批評家たちは小説創作の停滞をも呼び起こすような議論を続けたのかという疑問が生じる。その理由として批評家たち自身の社会的な精神的不安が挙げられる。18世紀後半に、小説は「市民の叙事詩」^{xvii}と呼ばれ始めた。貴族のための高級ジャンルである叙事詩にたいして、新興のジャンルでありなおかつ親しみやすい小説に、市民は文化的アイデンティティーを表現する場を求めたのである。19世紀ドイツの市民層「教養市民層」Bildungsbürgertum^{xix}は、高い教育と専門的な職業によって社会的な地位を上昇させた。逆の見方をすると、高学歴を獲得しなければ地位の保障がえられないという社会的圧力を感じていたともいえる。努力のすえに獲得した地位を権威づけ、社会的に有利な立場にあることを正当化するために、自分たちのジャンルである小説にも精神性の高さを欲していた。小説を論じる批評家たちの多くも教養市民層である。

『修業時代』を基準に形成された小説論を支持した批評家たちは、近代的個人として抱えた不安を小説論に投影したのである。19世紀ドイツの小説論にはこの「時代の病」が明確に読み取れる。

こうした傾向にたいして批判的な立場をとる批評家たちももちろんいた。「若きドイツ」と呼ばれる世代の作家たちはその代表格である。例えばルードヴィヒ・ベルネが「もし小説の主人公は悩ましげな態度をとり、すべてを受け入れ、不平を言うてはならないというゲーテの原則が真実であるとするならば、どうしてわれわれはみな生まれながらにして小説の主人公であるというのによい小説を持っていないのだろうか。われわれにはよい小説はない、なぜならこの原則が真実であるからだ」^{xx}と述べていることばから、ゲーテの作品の持つ権威が次の世代の創作活動に否定的に作用したことをうかがうことができる。ドイツ性を強調し内面性を重視しかつゲーテに倣うことを基準にした小説論が多数派を占め、小説にたいする見解を硬直化させていたという当時の状況が浮かびあがってくる。これにたいしベルネは、理念を現実世界と結合させ文学作品にも時代を反映させるよう、つまり時代に合わせて文学を刷新するように主張し、この状況の打開を試みた。さらに、若きドイツの作家であるルドルフ・ヴィーンバルクにも同様の主張を認めることができる。「時代をつかみとれ、あなたたち自身の心のうちをつかみとれ。だがしかしあなたたち自身を造形する前に羽ペンを手にはならないし、創造者や企画者になってはならない。時代をつかみとれ、生活をよりどころとせよ。私は、あなたたちが何と出くわすかを知っている。今の時代そしてわたしたちがドイツで営んでいるこの生活においては、ほんとうにわずかしかな文学がないではないか。時代史的小説der zeitgeschichtliche Romanのための題材はどこから取られるのだろうか。私はこれにたいして、ゲーテはどこからヴィルヘルム・マイスターのため

にそれをとってきたのだろうかと問いたい。—私の言いたいことを正しくわかっていただきたい。この世のどこにももうヴィルヘルムはいないのだ。それはやり尽くされてしまったのであり、それはゲーテと彼の時代のものなのだ。^{xxi} このテキストではヴィルヘルム・マイスターの影響を脱した新しい小説が「時代史的な小説」der zeitgeschichtliche Romanと呼ばれている。「時代史的な小説」とは、作品が創作された時代を反映した作品という意味であり、過去の「時代史的な小説」は過去のものであり、これから新しく作られる小説は現在の状況を反映すべきであるとされている。「時代」Zeitや「歴史」Geschichteという語がもちいられているが、これは過去ではなくアクチュアルな時代を指していることは引用した箇所から明白である。ここでようやく本論が主張するZeitromanの第四の解釈「同時代小説」という概念の発生を確認することができるだろう。ヴィーンバルクの他に、グツコウは『幽霊の騎士』Die Ritter vom Geisteという1850年に発表した小説で「横並びの小説」der Roman von Nebeneinanderという概念を提唱している。^{xxii} ここで言う横並びとは、同じ時代と場所に居合わせる人間たちを指している。人間の相互関係を小説で表現することが意図されている。グツコウは内面と個人の描写を重視する小説像に対抗して、イギリスやフランスに見られた社会的な関係を重視する小説をドイツに導入しようと試みたのであった。「同時代小説」Zeitromanという語は、Bildungsromanという概念が「Bildungを描くRoman」という議論の文脈から時代を経るにつれて文化全体で形成されたのと同様に、「時代史的な小説」der zeitgeschichtliche Romanや「社会小説」der Gesellschaftsromanなどとならんで、新しい時代にふさわしい小説を求める議論のなかで生み出されていったのである。そしてこの概念は、ヴィルヘルム・マイスター的だと思こまれた内面描写と精神性に価値をおく小説に対抗し、これを克服して同時代の社会をテーマとして扱うことを期待されていた。19世紀半ば以降の文学批評ではZeitromanとBildungsromanは対立していたのである。

3. Zeitromanによるパロディーの発生

Bildungsromanとされる作品を議論する場合、しばしば先行する作品から受けた影響（多くの場合は『修業時代』に限定できる）がしばしば重視されてきた。しかしトーマス・マンの生きた時代について考えてみると、彼は『修業時代』を知っただけでなく、ケラーやシュティフターの時代にはほとんど評価されていなかった続編『遍歴時代』が見直されワイマール版ゲーテ全集に所収された時代に生きていた。マンは1910年の『演劇的使命』の再発見でさえ知っていた。さらにゲーテやジャン・パウルが作品を書いた頃にはまだ造語もされていなかったBildungsromanも、彼にとっては常識であった。マンの作品におけるBildungsromanを考察するためには、Bildungsromanとされる作品の伝統や『修業時代』との影響関係に注目するだけでなく、Bildungsroman論を生み出した小説批評全体の文脈の中でとらえなくてはならないのである。トーマス・マンは『魔の山』を、たとえパロディーであるにしてもBildungsromanの流れに立つ作品であるとたびたび言及してきた。そのためこの小説がBildungsromanでありながら同時にZeitromanでもあるということは、当時の小説論の経緯からみると相矛盾する概念が並存している特殊な状況であることに気づかなければならない。

トーマス・マンは1923年の講演でドイツの小説の特徴について、「ドイツ人の最も優れた特徴は内面性です。これは彼らの特徴のうちでもっとも有名なもので、彼ら自身がそのことを一番好んで自慢にしています。ドイツ人がこの世にBildungsromanや発展小説Entwicklungsromanという精神的できわめて人間的な芸術ジャンルをもたらしたのは必然的なのです。こうした小説をドイツ人は西側の社会批判的な小説のタイプにたいして彼ら独自のものとしてうち立てました。この小説はつねに自伝でもあり告白でもあります。内面性、すなわちドイツ人のBildung、これ

は没頭であり、個人の文化的良心なのです。自分の自我に取り組み、形作り、深め、そして完成することへとむけられた、あるいは宗教的に言えば、自らの生を救済し、義とすることへ向けられた意識なのです」^{xxiii}と述べている。ドイツの小説はBildungsromanであり、ここで挙げられた「西側の社会批判的な小説のタイプ」が、小説理論一般でいう「同時代小説」としてのZeitromanに相当する。このように彼はZeitromanをBildungsromanと対立するように位置づけているにも関わらず、『魔の山』ではZeitromanを人間の内面の時間感覚と客観的な尺度で測られた時間のズレをテーマにするという意味で用いている。つまり彼は社会的な側面を強調した「同時代小説」を、個人が内的に知覚する「時間小説」へと換骨奪胎したのである。Zeitromanを内面化し、Bildungsromanと並んで用いた『魔の山』は、社会小説の実現を目指したドイツにおける試みは無意味であったという皮肉として受け止めることができる。Zeitromanであるはずの作品がBildungsromanでもあることは、ドイツの小説の新しいあり方を模索していた当時の状況にたいして痛烈な批判となっているのである。

しかしマンのすぐれた点は「同時代小説」の実現を批判しながら、その対立概念であるBildungsromanにたいしても無邪気な信頼を寄せることなく批判的に距離をおいてパロディー化していることである。ZeitromanがBildungsromanへのコンプレックスという病ならば、Bildungsromanもまた病とみなしうる。それは主人公に成長を強要せずにはいられない「不安」という名の病である。これは精神の高みにまで上り自らを全人として完成しなければならないという教養市民層が抱いた強迫観念であり、同時に俗物でありながら自らを完全な人間と思いついて振る舞うというおかしみをも生み出した要因なのである。ZeitromanとBildungsromanの対立によって小説批評に顕在化したドイツの文化的病の一断面は『魔の山』に重ね合わせて読むことができる。ドイツの病的状態を表しているのは最も重要なモチーフである結核である。この小説の中で病は才能や高貴さと結びつくか否かについて論じられている箇所がある(138)。病が高貴なものであるという主人公の安易な思い込みは、小説を高貴なジャンルに仕立て上げようとする小説批評が病んでいることを暗示しているのである。療養所に集う患者たちは、シュテル夫人に代表されるように、俗物のカリカチュアである。そのなかでもとくに「文明の論士」セッテムブリーニは小説批評家たちを具現している。

セッテムブリーニはダヴォスに結核患者として逗留している貧しいイタリア人で、サナトリウムでは主人公ハンス・カストルプの教師役を自ら買って出る。彼はフリーメイソンの会員という設定になっているが、ここでのフリーメイソン団は迷妄から有用性・合理性・民主主義へと突き進んだ結果、18世紀的なあり方と乖離し祖国やビジネスといったこの世的な関心によって結集しているブルジョワ的なクラブに過ぎないとされている(708)。これは、18世紀の小説観が市民的な世俗の関心へと引き寄せられて論じられるようになった19世紀全般にわたる小説論の動きとも一致している。セッテムブリーニはドイツ語で話すのだが、彼のドイツ語は「外国のアクセントがなかったが、ただ発音が正確すぎて、場合によっては外国人だとわかったことだろう」(83)という。彼の正しすぎるがゆえに逆に不自然に響くドイツ語は、正論を主張しているかもしれないが不自然になってしまったドイツを擬人化した存在であることを暗示している。くたびれた服と哀れにやせた身体、治る見込みのない重い病は、いわゆる「ドイツ精神」の不毛さを体現していると解釈することができるだろう。また彼は「進歩組成国際同盟」という組織に依頼されて、人類の苦悩にかんする百科事典を執筆しているのであるが、「この大きな仕事は、人間の苦悩を題材としている限り、美しい精神をなおざりにしたりはしませんよ。だから悩める人々に慰めと教訓にしてもらうために、あらゆるトラブルに際して参照することが出来る世界文学の名作Meisterwerkeすべてについての要約とちょっとした分析をおこなう独立した巻も予定されているんですよ」(344)という。この箇所は、Bildungsromanを信奉している「悩める人々」には名作(ドイツ語でマイスターの作品、つまり『ヴィルヘルム・マイスター』という作品)が参照できるのみだ、と19世紀から20世紀にかけてのドイツ文学界への皮肉の表明として読むことができる。

病んだドイツ近代小説観を体現するセッテムブリーニは、主人公ハンス・カストルプを教育しようと、つまり彼の思想の支持者にしようと、文化的な議論を長々と聞かせ続ける。彼が知人ナフタとともに繰り広げる議論は文化的に高度な内容で、多くの読者を魅了してやまない。しかしこれにたいしてハンス・カストルプは従兄とともにその場に居合わせてはいるが、議論を聞いているにもかかわらず見事なまでに影響を受けていないことが読み取れるのである。たとえば最終章にあたる第七章で次のようなエピソードがある。セッテムブリーニはハンス・カストルプに戦争（第一次世界大戦）が勃発しそうだという緊迫した国際関係を伝えにやってくる。セッテムブリーニは学校教師が生徒に求めるように、この問いかけにハンス・カストルプが学習成果の達成を表すような、彼と同様の緊迫感をもった答えを返すことを期待する。ところが、トランプをしながらセッテムブリーニの話を聞いていたハンスは、次のような態度で応じる。

「七と四、[・・・] 八と三。ジャックとクインにキング。これはいけそうだ。あなたのおかげでついてきましたよ、セッテムブリーニさん。」

イタリア人は黙り込んだ。ハンス・カストルプは彼の黒い目が、理性と道徳のまなざしが深い悲しみに沈んでいるように感じた。ハンス・カストルプはなおも少し横になっていたが、頬杖をつき、いずらっ子の怒って頑固になった無邪気な顔で、彼の前に立ちはだかる家庭教師を見上げた。(880)

セッテムブリーニはハンス・カストルプを教育しようと懸命に努力したにもかかわらず、なんの変化も生み出すことができなかつたことがこの場面で露呈している。これは逆にハンス・カストルプの側からすれば、強迫的に成長を求めるドイツ精神へ抵抗し勝利したとみなすことができる。主人公は「単純」とネガティブに評価される性格によって、逆に成長を強要するドイツ精神こそが病んでいる実態を露呈させているのである。そもそもハンス・カストルプは物語の始まりの時点で大学教育を終了し、これから見習い仕事を始めようとしている段階まで到達しており教養市民層の資格である大学教育は立派に終えている(55)。その一方で精神の深みを知らないという理由で「人生の厄介息子」das Sorgenkind des Lebensと繰り返され、これからさらなる修練が必要であるかのように見せかけられている。だがしかしマンはハンス・カストルプに知識の獲得によって生み出される自己満足や教養市民を演じる気取りを身につけさせようとはしない。ハンスは明るく無邪気で何も考えていないように描写される一方、悟りを啓く瞬間を与えられ、その高次の知にふさわしく成熟していることを証明している。それは雪山で嵐に遭遇する場面で描写されている。彼は遠く意識の中でさまざまな夢想にとらわれつつ、「ぼくはこの上で臆病風や理性についてたくさんのことを聞いた。ぼくはナフタやセッテムブリーニと一緒に、とても危ない山の中で死にそうになった。ぼくは人間のすべてを知っている。その肉と血を知ってしまった。病気のクラウディアにプリビスラフ・ヒッベの鉛筆を返したのだ。でも肉体と生命を知った者は、死を知ることになる。ただこれがすべてというわけではないのだ、一教育的に受け止めるならば、むしろただの始まりに過ぎないんだ」(684)ということに思いついたのである。この短い考察においてすら、セッテムブリーニがハンス・カストルプに与えようとする教育は彼を死に導くものとして退けられる。代わって、真の教育は生と死の尊厳に目覚めることであり、彼は自らの力でそれをなしたのである。ハンス・カストルプにとって大切なことは、知識や精神性をふくらませて満足することではなく、人間の生を再確認し、この「ただの始まり」からひたむきに生き続けることなのである。この生と死の相克から生を選ぶという最も重要なモチーフは、作品全体にちりばめられている。ハンス・カストルプが結核治療ではじめてのレントゲン撮影に臨んださい、特別に許可をもらって自分の右手を透かす場面もその一例である。自分の骨を見た時に、彼は自分が死すべき人間であることを悟る。マンが何度も強調したとおり、この作品の本質は「人間は善と愛ゆえに、死に思考を支配させてはならない」(686)とあり、死に

たいする生の勝利を宣言するために構築されている。現実を受け入れ肯定することこそが近代ドイツ小説論の病を克服する道であることを、トーマス・マンは主人公をとおして表現しているのである。

この小説の最後のシーンでハンス・カストルプは、兵士として泥にまみれ、爆音のなかを必死に前進している。セッテムブリーニが新聞の第一報を知らせに来たときに悠長にかまえていたにもかかわらず、彼は実際に山を降りて兵士になったのである。教師を自任していた男は知らせに取り乱すだけであったが、成績の悪い生徒とみなされていたハンスこそが事実を冷静に受け止め、行動を開始した。その事実が重要なのであって、ここから先ハンスにどのような運命が待ち受けているのかは、読み手の自由な想像力に完全に委ねられている。知識や精神性の深さを基準にして主人公が成長したのか否かを問うこと自体が不毛である。『魔の山』ではBildungsromanやErziehungsroman、Entwicklungsromanの名のもとに求められていた社会での成功という要求は、皮相なものとして一掃されてしまう。なぜならば、この作品はそうした教育的な小説のパロディーだからである。

4. まとめ

『魔の山』は、身体を病んだ青年に心身ともに健やかな成長を迫ることでBildungsromanを痛烈に皮肉っているが、これに加えて、BildungsromanとZeitromanの対立によって端的に示される19世紀小説論の論争をZeitromanの内面化とBildungsromanとの同一化によって無意味にすることで、時代精神をもパロディー化し、戯画化しているのである。この結果、さきにマンが1923年の講演で述べていたドイツ人の最も優れた特徴が内面性であり、ドイツ人がBildungsromanや発展小説Entwicklungsromanという精神的で人間的な芸術ジャンルをもたらしたのは必然的であるという見解は、真面目に語られるほど、皮肉と諧謔が増してくるように思われる。このように文化的・精神的混乱状態に距離をたもって観察し、おかしみを浮き上がらせる一方で、ハンス・カストルプをとおして、病の克服へと向かう道を、つまり健全な小説観への解決策を提示している。それはつまり、彼のように明るく強くあること、生の尊厳に目覚めること、自己欺瞞に陥らぬこと、銜学趣味に染まらぬことである。ゲーテのヴィルヘルム・マイスターの強さも実はこの点に認められる。解釈においてはヴィルヘルムがいかに完璧で調和的な完成を成し遂げたかということが強調されるが、彼の成功の本質は明るく強く生きることによって得た幸運である。^{xiv} 批評にみられる誇張された表現は、彼の幸運への賛辞と羨望の表れと理解すべきであろう。トーマス・マンは、多くの言論に惑わされることなく、ゲーテの作品の本質を継承している。トーマス・マンは、ZeitromanとBildungsromanを両方同時に作品に取り込むことで、彼以前のBildungsromanへのパロディーを成立させただけでなく、さらに小説論争を含む文化全体のパロディーとしての効果を生み出すことに成功したのである。

テキスト：

Thomas Mann, Der Zauberberg. Roman. In: Th. M., Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Bd. III. Frankfurt a. M. 1960. Zweite, durchgesehene Aufl. 1974.

引用・参照に際しては、本文にカッコつきでページ数を表記する。

本論は2008年7月19日に開催された北海道ドイツ文学会研究発表会（於 北海道薬科大学）における口頭発表に加筆訂正を加えたものである。

- i ホモセクシュアリティや精神分析との関連など、文学以外の分野と関連付けた研究が多くみられる。Vgl. 田村和彦 『魔法の山に登る トーマス・マンと身体』 関西学院出版会 2002年。Heinz Schott, Krankheit und Magie. Der Zauberberg im medizinhistorischen Kontext. In: Thomas Sprecher (Hrsg.), Auf dem Weg zum „Zauberberg“ : Davoser Literaturtage 1996. Frankfurt a. M. 1997.
- ii Vgl. W. Frizen, Zaubertrank der Metaphysik. Quellenkritische Überlegungen im Umkreis der Schopenhauer-Rezeption Thomas Manns, Frankfurt a. M. 1980. H. Lehnert, Leo Naphta und sein Autor. In: Orbis litterarum 37(1982), S. 47-69.
- iii Vgl. Jürgen Jacobs, Wilhelm Meister und seine Brüder. Untersuchungen zum deutschen Bildungsroman. München 1983. Wilhelm Voßkamp, Der Bildungsroman als literarisch-soziale Institution. Begriffs- und funktionsgeschichtliche Überlegungen zum deutschen Bildungsroman am Ende des 18. und Beginn des 19. Jahrhunderts. In: Zur Terminologie der Literaturwissenschaft. Hrsg. v. Christian Wagenknecht. Stuttgart 1989, S. 337-352.
- iv Bildungsromanは日本語では通常「教養小説」と訳されている。しかし本論で主張するように、BildungsromanのBildungの意味が、19世紀初頭に「形成」から「教育」へと変化し、さらにその後「教養」という訳語がふさわしい文脈で使われるようになったので、訳語を固定するのは困難である。また原語表記のほうが“-roman “の形をとるさまざまな複合語との関連が見やすいので、基本的にBildungsromanと表記する。
- v Vgl. Thomas Mann, Selbstkommentare: „Der Zauberberg“. Hrsg. v. Hans Wysling unter Mitwirkung v. Marianne Eich-Fischer. Frankfurt a. M. 1993, S. 32.
- vi „Schon die Erneuerung des deutschen Bildungsromans auf Grund und im Zeichen der Lungentuberkulose ist eine Parodie.“ In: Ebd., S. 91.
- vii G・ルカーチはBildungsroman定義を「問題を抱えてはいるが体験に基づいた理想に導かれたある人物が具体的な社会的現実と宥和すること」としている (Georg Lukács, Die Theorie des Romans. Ein Geschichtsphilosophischer Versuch über die Formen der großen Epik. 1994. 2. Auflage. München 2000, S. 117.)。その後多くの論者がこうした定義にもとづいて議論を発展させている。
- viii Klaus-Dieter Sorg, Gebrochene Teleologie. Studien zum Bildungsroman von Goethe bis Thomas Mann. Heidelberg 1983.
- ix Vgl. Alexander Honold, Die Uhr des Himmels. Zeitchen über dem Zauberberg. In: M. Bergengruen, D. Giuriato, S. Zanetti (Hrsg.), Gestirn und Literatur im 20. Jahrhundert. Frankfurt a. M., 2006, S. 277-294.
- x Vgl. V. Hansen, Thomas Mann. „Zauberberg“. Hans Castorps Weg ins Freie oder „Der Zauberberg“ als Zeitroman. In: Romane des 20. Jahrhunderts, Bd. 1, Stuttgart 1993.
- xi Vgl. Dirk Göttsche, Zeitroman. In: Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft. Hrsg. v. Jan-Dirk Müller. Bd. 3. Berlin 2003, S. 881-883. Wolfgang Beutin, Historischer und Zeit-Roman. In: Hansers Sozialgeschichte der deutschen Literatur vom 16. Jahrhundert bis zur Gegenwart. Begr. von Rolf Grimminger. München [u. a.] Bd. 5. Zwischen Restauration und Revolution 1815-1848. Hrsg. v. Gert Sautermeister und Ulrich Schmid. 1998, S. 175-194. Peter Hasubek, Der Zeitroman. Ein Romantypus des 19. Jahrhunderts. In: Zf d Ph. 87 (1968), S. 218-245.
- xii Vgl. „Er [der Zauberberg] ist ein Zeitroman im doppelten Sinn: einmal historisch, indem er das innere Bild einer Epoche, der europäischen Vorkriegszeit, zu entwerfen versucht, dann aber, weil die reine Zeit selbst sein Gegenstand ist, den er nicht nur als die Erfahrung seines Helden, sondern auch in und durch sich selbst behandelt.“ In: Thomas Mann, Einführung in den „Zauberberg“. In: Th. M., Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Bd. XI, S. 602-617, S. 611f.
- xiii バロック期の小説については以下の文献を参照した。Vgl. ヴィルヘルム・エムリッヒ 『アレゴリーとしての文学—バロック期のドイツ』 道籐泰三訳 平凡社 1993年。
- xiv Vgl. Friedrich von Blanckenburg, Versuch über den Roman. Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774. Mit einem Nachwort von Eberhard Lämmert. 1965 Stuttgart, S. 252.
- xv Vgl. Ebd., S. 284.
- xiv Vgl. Ebd., S. 324.
- xvii Vgl. Karl Morgenstern, Ueber das Wesen des Bildungsromans. Aus: Cahr Eduard Raupach (Hrsg.), Inländisches Museum 1 (1820), H. 2. S. 46-61 und H. 3, S. 13-27. In: Rolf Selbmann (Hrsg.), Zur

- Geschichte des deutschen Bildungsromans. Darmstadt 1988 (Wege der Forschung; Bd. 640), S. 64.
- xviii Vgl. Johhan Karl Wezel, Vorrede. In: J. K. W., Hermann und Ulrike. Erster Band. Leipzig 1780, S. I. – Reprgr. Nachdr. Stuttgart 1971, S. III.
- xix 教養市民層については以下の文献を参照した。Vgl. Rudolf Vierhaus, Bildung. In: Brunner, Otto. Conze, Werner. Koselleck, Reinhart. (Hrsg.), Geschichtliche Grundbegriffe. Historische Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland. Stuttgart 1972. Bd. 1, S. 508-551.
- xx Ludwig Börne, Coopers Romane [1825], In: L. B., Sämtliche Schriften. Neu Bearbeitet und herausgegeben von Inge und Peter Rippmann, Bd. 2. Düsseldorf 1964, S. 395-403, S. 395.
- xxi Ludolf Wienbarg, Faule und frische Romane. Aus: L. W., Wanderungen durch den Thierkreis. Hamburg 1835. S. 239-260. In: H. Steinecke u. F. Wahrenburg (Hrsg.), Romantheorie. Texte vom Barock bis zur Gegenwart. Stuttgart 1999, S. 341-342, S. 341.
- xxii Vgl. Karl Gutzkow, Die Ritter vom Geiste. Vorwort. In: K. G., Werke. Bd. 5. Hrsg. v. Reinhold Gense. Berlin [u. a.] 1912. Reprgr. Nachdr. Hildesheim / New York 1974, S. 42.
- xxiii Thomas Mann, Geist und Wesen der deutschen Republik. Dem Gedächtnis Walther Rathenaus. In: Th. M., a. a. O., Bd. XI, S. 853-869, S. 854.
- xxiv 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』についての詳細な分析は拙論をご参照いただきたい。Vgl. 北原寛子 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は「教養小説」なのか？—エロスの視点から読み解く— ドイツ文学論攷 第44号 (2002年) 67-87頁。